プロジェクト名：**中世ヨーロッパにおける**
歴史叙述のアイデンティティ形成力に関する研究

プロジェクト代表者：鈴木道也（教育学部・准教授）

１　研究の目的：

本研究は、「歴史家は権力によってお墨付きを得、歴史叙述の生命力は権力の強度に左右される一方、権力は歴史家の語りによって正統性を証し、その権能を強化する」とするルイ・マランの指摘を踏まえ、現代社会における歴史叙述の位置づけを再考するための手がかりとして、中世フランス王国で編纂された『王の物語(Romans des Rois)』（あるいは『フランス大年代記（Grandes Chroniques de France）』：以下 GCF と略記）を中心的な史料とし、以下２点の解明を課題としている。

(a)多様な歴史認識が交錯する中世社会にあって、権力体としての国家の成長と変容は、「歴史家」たちの語りをどう変えたのか。

(b)歴史叙述に携わる当時の知的エリートたちは、どのような意識と方法論をもってそれぞれの史書を組み立てていたのか。

２　研究の進め方：

①王朝と修史家たち：GCF をはじめとして「フランス史」あるいは「フランク史」と題される年代記は数多く存在しており、作成主体も多様である。中世フランス王国のカペー王権に限定しても、王家と連携して史書編纂事業を進めていく修道院は、王朝発足以来、フルリ修道院、サン＝ジェルマン=デ=プレ修道院、そして GCF のサン＝ドニ修道院へと交代している。こうした王朝専属修史家の交代はいかなる背景を持つのか、その解明を通じて、当時の知的エリートたちの「フランス観」「王国観」の多様性とその競合について考察する。

②改変される記憶：GCF 写本の具体的記述内容に関しては、本来ならばその全体に渡って具体的な加筆・修正箇所の検討を行うべきであるが、その前段としてまずは、 GCF冒頭の王朝起源神話からメロヴィング朝時代に関する記述に関して、一方ではGCF成立の前段をなす９世紀から13世紀にかけての、「教会史」的歴史叙述を含む複数の歴史叙述とその内容を比較するとともに、他方では13 世紀後半から 14 世紀に普及した初期の GCF 写本群を対象に、個々の内容の偏差とその意味について考察する。

３　研究の成果：

①GCF は、その冒頭にフランク人のトロイア起源神話を置き、以後の歴史をフランク人王の血統的連続性を基本線としてフランク（フランス）史を描き出している。その基本的姿勢は、歴史を単線的で不可逆的なものとして描き出そうとしており、各王の治世は、その誕生と死が始まりと終わりをなし、その間の事績が時系列に沿って澱みなく記されていく。同時代を描く複数の史書は、基本的にはオリジナルがそのまま接合されており、そこから一定の基準に基づいた自由な取捨選択が行われるといったことはないものの、単なる継ぎ合わせでなく、重複箇所を削除したり、欠落部分は補ったり、また原典における脱線したり過去にさかのぼる記述には注記が施されたりしている。

②中世初期メロヴィング王朝期にあっては、トゥール司教グレゴリウスの『歴史十書』に代表されるように、フランク王クローヴィスの改宗を一大画期としてキリスト教的世界観のなかにフランク王国史を位置づける傾向が顕著であった。GCF は、こうしたいわゆる「教会史」的歴史叙述と同様、一人一人の王の事績や治世中の主な出来事の具体的な描写よりも、前後の王との系譜的連続性の説明に重点を置いている。しかしそこで強調されるのは、キリスト教的なそれよりも、フランク（フランス）王朝の系譜的連続性であり、王位の継承、あるいは王朝の継承が持つ意味について、微妙な修正が施されている

③王朝神話としてトロイア起源神話が選択された背景を、『歴史十書』から GCF に至る途上で編まれた数多くの史書の系譜関係分析によって考察した。

（具体的には、1『偽フレデガリウス年代記』、2 編者不詳『フランク人の史書』、3 エモワン・ド・フルリ『フランク人の歴史』）、そして『王の物語』の祖型をなす四点の歴史書集成[1.11ー12 世紀：サン・ジェルマン・デ・プレ修道院編ラテン語年代記集成 [B.N.latin.12711]、2.13 世紀初め：サン・ドニ修道院編ラテン語年代記集成 A [Vatican,Reg.lat.550] 、3.13 世紀前半：『シャンティイ年代記』[Chantilly,MS.869]、4.1250 年頃：サン・ドニ修道院編ラテン語年代記集成 B[B.N.lat.5925]）

その結果、GCF は基本的には『フランク人の歴史』をその典拠史料として利用しつつも、個々の叙述には部分的な修正が加えられていることが明らかとなった。例えば『歴史十書』などがとくに重視するクローヴィス結婚に関して、当事者二人の恋愛感情を結婚の大前提とし、対して（結婚に反対する）クロチルドの叔父ゴンドバルトの残虐性を強調することで、信仰の違いとその後の改宗は、結婚後の二人の諍いの原因と和解の結果として描写される。この事例が象徴的に示すように、GCF においては、メロヴィング王朝史を「神意ではなく人意」によって織りなされる王朝史話として描き出そうとするカペー朝の王権観が明確に反映されていた。一定の「筋立て」を持って歴史を語るその手法は、聖書以来の伝統を継承するものであるが、ここにおいて歴史叙述は現代のそれへとつながる世俗的性格を獲得している。